

# 1. 3. 1 闘争宣言 (案)

## 全都教員・学生・生徒処分紛争決起集会

日本ブルジョアジーは、戦後民主化、近代化、合理化による人民、とりわけ労働者階級に対する徹底した搾取に成功し、60年安保改定を通じて、日本の帝国主義的再編を行い、あらゆる社会構造の中に戦後資本主義特有の管理体制網を張りめぐらそうとし、おおよそその野望を達成した。しかし60年代に入るや、日本帝国主義は、沖縄を要とするヴェトナム戦での米軍の後衛基地を設営しつつ、自らも東南アジア侵出を着々と実現し、これら地域への徹底した収奪を通じて、国民総生産世界第2位の繁栄をむさぼるにいたつたのである。

日本人民は60年安保闘争において、労働者、学生、市民による壮大な反帝統一戦線を形成し、日米軍事同盟の強化と、日本帝国主義の伸長に対し一定の打撃を与えた。この時点まで、学生戦線にあつては、樺美智子に代表される犠牲を出したとはいえ、なお闘争過程における犠牲の主要部分は、2.1、レッド・ページ、三池等に見られるように、労働戦線がそれを担う状況にあつた。労働運動に組織された大衆は、改良路線にあつた社会党、反革命的に闘争圧殺を行う共産党に領導されたが故に、60年代管理体制を確立しつつあつた日帝の動向を先取りすることができず、その大部分は自らの闘いを帝国主義者との決定的対決とすることなく、むしろ帝国主義的柔構造の中に埋没させていかざるを得なかつた。

60年代において世界史舞台に登場したヴェトナム戦争の悲惨は、全世界規模の人民プロレタリアにその自覚を喚起したのであるが、この中であつて日本の学生戦線もようやくその本質的昂揚期を迎え、68~69年日大闘争に始まる全国学園闘争は、日帝がそれまで形成していた管理体制の教育体系、科学体系の頂点をなし、また弱点をもなした大学を攻め、パリケード実力闘争による管理体制の徹底的破壊を貫徹させていつた。世界的ヴェトナム反戦学生戦線は、そうした攻撃的知性によつて始めて労働戦線と比較し得る質を獲得したのである。

このことにとどまらず、全国学園になびいた全共闘の旗は、過去一切の学生戦線の質を揚棄して、プロレタリアへの自覚を形成しつつ文字通り学生的存在の自己を否定し、学生的存在を拘束する大学管理機構を破壊し、大学の存在そのものの否定と、そこに頂点的に君臨する東京帝国主義大学の否定解体を目指す根底的闘いを、自らに、そして全人民、プロレタリアにつきつけた。呼応する層は、ただに学生、高校生、大学小中高校の反戦派教員だけでなく、各労働者層に急速に拡がり、このことは教育、科学以外のすべての機関内における、近代化、民主化、合理化による帝国主義的管理機構の再編強化を見抜き、それと対決する70年代における闘いを先取りし、目的意識化された反乱に発展する起爆的性格を持つものであつた。

こうした学生戦線の攻撃的知性に恐怖したブルジョアジーは、過去の欺瞞的の大学自治の懐柔策を放棄し、まさに大学の管理運営を直接掌握すべく、大学立法とそれにテコ入れされた機動隊の直接介入を通じ、国家権力のあらゆる手段を構じての全共闘弾圧に乗り出してきたのである。さらに学内少数秩序派は、こうした国家権力の秩序維持軍の登場によつて勇気を得、国家権力の下僕となつて弾圧と抑圧の最先鋒に起ち自らの生活基盤防衛というカムフラージュの中で、徹底的暴力性を発揮してきた。さらに大学全共闘の闘いが地元へ拡大し、高校にまで拡大するや、教員の存在の本質である管理者性はますます暴露され、まさに大学、高校がアウシュビッツの生き地獄の様相となつた。鉄条網、鉄板、金網、鉄格子と幾重にも張りめぐらされた教育機関の現実的姿は、今日の教育体系、科学体系が帝国主義的管理体制の中に位置する立場を明確に示している。

全共闘運動が、こうした政府権力の全面的攻撃の前に、種々困難な局面を迎え、部分的に後退を余儀なくされている現況下にあつて、特徴的に指摘できることは、第1に、大学当局、教育委員会等教育末端権力は、この機に乗じて全共闘派、反戦派の一掃を狙うべく最後の賭ともいふべき全共闘派、反戦派にたいするページを開始したことであり、しかしながら第2に、なお強力である全共闘運動による蜂起を怖れるがゆえに、またなお消算し切れない柔構造要素によるブレーキ作用によつて、全共闘派にたいする正面切つての全面的大量処分はなお打出されておらず、告訴手段や、単位不取得に藉口とする処分等の欺瞞的方法が多く採用されていることである。

70年代においては、戦後帝国主義は、その従来の柔構造を一擲して、急速に剛構造に移行し、質的变化を遂げることはもはや必至であり、この意味においてわれわれはわれわれの前に現在する第2次レッドページに対処するには、第1次レッドページに対する改良主義にもとづく権利闘争的妥協は、もはや許されないことを自覚し、同時多発的蜂起による学園再占拠を含むあらゆる方法をもつて、学園を再びわれわれの拠点として確保し、大学学園を追放されつつある多くの同志の連帯軸としての大学学園解放闘争を即時に組織、準備しなければならない。これのみが、今日の支配管理者によつて展開されている処分弾圧、抑圧に耐える唯一の方策であり、同時に処分撤回を単なる復権闘争に終らしめることなく、それを大学、学園解体、社会的総反乱の一環として位置づける最も直接的な手段なのである。

ここに、全都教員、学生、生徒処分紛争集会は自らの闘争権利を声高く主張するとともに、弾圧抑圧者に対して徹底した闘争を組織することを宣言し、学園闘争の70年代の蜂起を準備し、70年代階級闘争に自らの存在基盤である教育体系、科学体系の破壊を以つて参加していくであろうことを宣言する。

1970年1月31日

### スローガン

1. 安保・沖縄闘争勝利 /

1. 学園闘争勝利 /

1. 70年代階級闘争勝利 /

1. 高校・大学全共闘・反戦派教員へのページ処分に抗して、あらゆる学園・生産点に占拠・蜂起を準備せよ /